

2018年
5月30日
水曜日

東田 啓作 教授（環境経済学・国際経済学）

経験と選好

経済学部生が経済学の基礎の授業で最初に学ぶものの一つに需要があります。需要曲線の高さは買い手の支払許容額を表しています。支払許容額や多くの種類の財の中からの財をいくつ買うかといった意思決定は、買い手の選好（好み）を反映しています。基礎的なミクロ経済学では、通常この選好は所与とされま

す。選好の変化によって需要曲線がシフトすることは学習しますが、選好がどのような要因に影響を受けてどの程度変化するかといったトピックは登場しません。

経済学者が注目する選好には、リスク選好、時間選好、利他性、競争選好などがあります。私が研究を続けてきている環境・資源経済学の分野でもこれらの選好は重要です。例えば時間選好は、将来の利得に比べて現在の利得を重要視する程度です。森林、さかなといった再生可能資源の利用を考えてみると分かりやすいです。今日伐採する（漁獲する）木（さかな）を少し我慢すれば、次世代の木（さかな）が育ち、長期にわたって利用し続けることができます。

ところが、人の好みは時とともに変化します。経済学には経験と人の選好の関係を研究する分野があります。経済実験と呼ばれる手法を用いて人々の選好を抽出し、経験がその選好を変化させたかどうかを分析するのです。

では、森林や水などのその地域の資源への依存度がとても高いです。集落の他の人々のことを考えて過剰な資源の利用を抑制しているケースがしばしばみられます。

世界中の様々な国・地域で経済実験が行われてきていますが、その一部は経験が人の選好や行動に与える影響を分析しています。Voors et al. (2012, Violent conflict and behavior: A field experiment in Burundi, *American Economic Review* 102, 941-964) は、ブルンジの内戦前後の変化に着目し、暴力（襲撃・虐殺）を経験していない人々に比べて経験した人々は、リスク選好が強く近視眼的である一方、近隣住民への利他性が強いことを明らかにしています。Prediger et al. (2014, Resource scarcity and antisocial behavior, *Journal of Public*

では、森林や水などのその地域の資源への依存度がとても高いです。集落の他の人々のことを考えて過剰な資源の利用を抑制しているケースがしばしばみられます。

Economics 119, 1-9) は、ナミビアの牧畜家を対象とした実験によって、資源量が少ない状態を経験すればするほど人は協力的ではなくなることで、厳密には他者の利得を減らすような行動をすることを明らかにしています。

このような選好の変化は多様です。災害や資源枯渇などの経験をした人々の選好の変化を明らかにすることで、制度をどのように作り変えていけばよいかを考えることができます。資源利用の例でいえば、資源の持続的な利用を実現するための方策が見えてくるのです。